



岩 波 文 庫

30・227・2

東海道中膝栗毛

下

十返舎一九作
麻生磯次校注

岩 波 書 店

江苏工业学院图书馆

30-227-2

東藏道中栗章
下

十返舎一九作
麻生磯次校注



岩波書店

目次

流の暁

7

車中の毒針

171

幻燈

293

かる業武太郎

363

快樂亭ブラック年譜

477

解説 伊藤秀雄

481

快樂亭ブラック集

明治探偵冒險小説集 2

流の 暁

第一回

今を距ること百二年前の七月十一日に仏国の都巴里に於て一の暴動起りし。この原因は数年前より政治が悪く、上に立つ者下の者を圧制いたし、税または小作等を無理に取立てたる事であります。もつとも人民のごく賤しい中等以下より起った事だによってこの暴動を防ぐに至りやすい事と考え兵士を呼出だし不平党の者を制そうとしたが、兵士はワイワイ連に向い士官より討てと云う号令を受けたる時に人民の云う事を賛成し国家万歳と云う声一面に起り、おおよそ八百人程士官の命令を背き人民に加勢いたし、その残りしところの兵士鉄砲を担いだるまま士官の命令を待たずして自分らの恣のままに引取りし。この景況を見て人民の騒動が日々に烈しくなり、巴里の城を預かつておる鎮台長及び知事を捕え強賊とし速やかにその咽喉を絞り首を落してその生首を棒の先に附け纏

として往来を持ち歩行あるきたるより、数百年前より密かに燻くすぶっておつたる不平党一時に焰を吹出し実に葺屋根こけらに火が附いた如くになり。誠に僅かなる間に帝国政府は滅亡つぶれ、その政治に関係しておつたる上に立つ役人のみならずいささかでも位或いは財産を持つてゐる者は国賊である、これらの者があるが為に我々が今まで圧制をされた、己れの快樂がくをする為に我々が今まで苦しい思いを致した、此奴こいつらは皆逃すべからず。ソウと云つて無暗むやみに押え何の罪もなき者といえども位財産ある者を憎んでたちまちの間に首を落してしまった。この時に仏蘭西フランスの都に於て僅かの間に八万人首を落されたという事は歴史に書き記してあります。

かくの通りの話をすればブラックは大袈裟の事を云う、なんぼ講釈師かうし扇子で嘘を叩き出しと云つてももうちつと真実ほんとらしい嘘を云つてもらいたい、まさか僅か百年前に仏國に於てかやうの事は無かつたろうとお考えなさるお方も定めてございましょうが、私毎夜寄席へ出席してお話を申し上げるにはなるたけ事情に背く嘘言いつわり等は申し上げんように致しておりやす。謬あやまった事を申し上げ分つたる人に聞かれて笑われるのは忌いや、またそれのみならず嘘を云えば閻魔に舌を抜かれると云う事も存じておりやすから、舌を抜れては明日より稼業が出来ない。ああ、どうしてどうして恐ろしくて嘘は申されません。この時の革命の折に仏蘭西フランスより日本の里数に致しますると七八十里隔たっております処

に、シャットワンヌフと申す城があります。此処にごく古えより代々住んでおります一人の貴族の家があります。位はさほど高くもないが財産と云えば多くの金満家のある仏国に於てもさのみ下がらんところの身代で、沢辺と云う当時の年齢はまだ若く僅か二十四を越したのみであつてなかなかよく教育も修め伶俐の男でありましたが、悲しいかな贅沢の中に育てられたるがゆえに男の氣性を幾分か失ない柔弱た女のような心の人で、或る日の事奥の座敷で煙草を喫しながら小説を読んでいるとその家来三郎と云う者が参り、

三「御前、書物をお読みのところをお邪魔いたしましたしては誠に恐れ入りますが、謹しんで少々御忠告いたしたい事があつて参りました、どうか一ツお聞き下さい」沢「ホーそれは何ですね」三「御前外ではございませんが、ただいま都に於ての暴動人民の騒ぎはかねて貴方も御存じでございましょうがこのまま事を済さずにおく時は追々に騒ぎが大きくなるばかり。此処は都より大分離れているゆえにまだ農民ら沸騰致さんが、今にも都の飛火が落れば一時に破裂するばかり。随分近所の村人ども不平党の起るを待っている様子、貴方は此所に今の通りに居ついていらしてはどういう事の間違ひが起らんと計られません。どうか今のうちに事の済ますまで他国へお退きなすつては如何でありますかと私一人でなく皆の者心配致しております。今のうち英国なり独逸国

なりまでお退き遊ばしたらどうでございましょう」サ「イヤ其方がそれを云うまでもなく、予もその事に気が附かんでいのではない。実にこの仏国に一日も居るのは忌じや、人民が皆な馬鹿になつて今まで恩を受けたる主人の事を忘れかえつてそれを憎んで、今まで上に立つた者や財産を持つておつた者をそれが為に我々が圧制されたとかそれが為に苦しかったと云う。イヤ実に実に思えば思えば人民は一人となく皆な癡狂したようじや。百姓や町人に政治の權を握らして議員に撰んで国会に集めさせるゆえにこんな事が出来るんだ、順序を失い程を忘れ一寸だけの力を持つと一尺の權理を取ろうとする者のあるには弱る。やっぱり以前のように下は下上は上の權理を以て抑えねば物事と云うものは穏やかに治まらん。けれどもこう云つたところが仕方が無い、実に今申した通りに一日も早く他国へまいり兵士の勢いでこの暴動の鎮まるまでこの仏国を離れたいは山々だが、何しろあいにく顔のよく知られている私、馬車に乗つて道中するその途中で引張り落されて切られる事を恐れ、それよりもいつそう此処に静かに依然としておつた方が安心であろうと思つたがゆえに、まだ何方にも参らずに此処に居るのさ」三「御前ただ今のお言葉誠にごもつともではあります、貴方様馬車にお乗り遊ばして例の通り御巡廻なれば、必らず途中に於て災いあると思ひますが、けれども貴方此処にこのまま依然としておられては遅かれ早かれ必らずお怪我あらうと案じやすが、それによつてぜひぜ

ひ今日にもこの城を立退きいずれへかお出でを願います」

第二回

三郎はなおも膝を進め、「今のお姿で馬車へお乗り遊ばして道中を遊ばしては沢辺男爵と知られて災いもありましようが、姿をお替え遊ばして馬車にも乗らず独りで歩行て道中遊ばされたならこの危険を逃れられん事もございますまいと考えます、まず貴方の髪の毛の長い浅草区議員高梨哲四郎君のようになったるをば短かくお刈りあそばして髻も落し、貴方のいたって色の白いところを薬でちつと黒く日に焼けたようにお塗りあそばして、ただ今召している上等の服を脱ぎ窮民の着ますような少々古くなった物をお召しあそばして御自身に風呂敷包みを背負て道中致されたなら、必らず沢辺男爵と知られずに他国まで首尾よく逃られようと考えます、御前私も先祖代々から貴方のお家の御恩を受けている、御主人にかようなお扮装を致してお逃なさいと云うのも失礼、怪しからん事と存じておりますけれども、もしも貴方の大切のお命に別条がありましてはそれこそ大変、実に少しの苦しみには代られません。かつ貴方にもまだ御相続人の無いゆえに家の死絶えると云う事になってはならず、どうか御前ただ今申した通りにお姿をお変え遊ばして下さい」沢「や承知いたした。まだそこまで予は気が付かなかったがなるほ

ど姿を変れば無事に道中が出来るかも知れず、コレ髪結でも呼びにやって予の髪を刈らせろ、髻を落させろ」三「御前失礼でございませうが貴方今お姿をお変えあそばすと云う御奮発のところ、髪結を呼びにやってそれに髪を刈らせ髻をお剃らせなすつては秘密の事を新聞に広告をするようのものでいずれの髪結でもお喋舌のものです、人の髪を刈りながら口が早く動くか鋏刀が早く動くかと云えばまずお喋舌の方が勝つ者が多いようです。もしも髪結を呼びに遣つて貴方の髪を刈らしたならば戻るや否すぐにその事を村の者に喋舌で貴方が相を変えたと云う事が皆なに知れて無駄になりやす。私は今まで鋏刀を手にとつた事もございせんがこう云う時には総ての事なるだけ秘密にして人に知らせぬが肝要なれば、御免蒙つて私が貴方の頭を挟みましょう」

とそう云つたるまゝいったん男爵先生の座敷を下り鋏刀を取寄せ、これより再び座敷に来て男爵が椅子に座つてゐるままその髪を短かく五分を出るか出ないくらいにジヨキジヨキ挟んだけれども、職人でない不馴れの事なれば長いのも出来短かいのも出来漸々出来上つたところの姿を見れば囚人が監獄署で散髪に刈られた如くよほど見苦しい頭になりました。これより薬を持って来て顔も塗り日に焼けたように黒くして、これですまず身体はいいがこれより心配するのは着物じゃ、立派な華族なれば粗末のものも無し古くなつたる衣服もなし、これから古着屋へ買いに往くのも間に合はずいずれに致そう

かとしばらく考えおりましたが、ふと気が付いたと見え突然屋敷の後ろの方にある既の
 処まで来り、馬丁部屋の処へ参り折助がみんな遊んでいるのをしばらく見、那奴なれば
 脊格好から肉の塩梅御前とたとえ違わんから彼がよからうと一人を撰んで、

三「コラ貴様にちよつと用があるから俺の室まで来い」と馬丁を連れて自分の部屋へ
 参り開き戸を閉め錠を下し、三「貴様に用があると云うは外じゃアないが今着ているそ
 の着物ちつと使い道があつてゐるんだが、俺に一つ売つてくれんか、五両やるからその
 着物を俺に呉れんか」と用人に云われて馬丁は旦那は氣でも違つたか、屑屋に売つても
 円助になるかならねエこの着物、五両で売つてくれとはヘン馬鹿な者があればあるもの
 だ、けれども此品をやれば一円で代りを買つてもあと四円残る、旨い酒の一盃も飲んで
 面白い遊びの一つも出来るだろうと考えたゆえ、馬「旦那この着物ですかえ……ヘエお
 入用なれば進上やしても宜しうございやす。しかし旦那この着物をあげちまうと私チが
 裸体になるが旦那の古いのか何かあるなら代りにお貰い申したいもので」三「ウムそう
 か、そんなら今着ている着物を脱いでは貴様が裸体になつて此処から部屋へ帰る事も出
 来ないと云うか、よし此品を着て往け」と簞笥の抽斗から少し古くなつた自分の服を一
 組取出だし、三「金を五両の外にこれを貴様にやるから早くその着物を脱げ」と云われ
 て、馬丁は着ておりました尻の破れたる上着、汚なくなつたる胴着、始終既で仕事をす

る時に着ているから馬の尿ちようずの臭気においがプンプンとする垢だらけのズボンを脱はり、あとに残りましたるは以前は白かったが今では汗で汚れて黄いろくなって醬油の中に漬けたような色のシャツ一ツ。三「オイオイそのシャツも入いるからそれも呉いれなくツちやアいかん」と云われて、馬「旦那これまでも入いるのですか」とシャツまでも脱ぎ、外国人は肌帯ゆもじをしめないから素裸すばだか体のフリになつてこれより貰もらつたる着物を着て退つて往きました。

第三回

三郎ただ今馬丁の脱ぎましたる着物を持ち御前の処へ来きたつて、三「ハイ御前、着物を拵こしらえてまいりました、どうぞこれをお召下さい」と目の前へ汚れたる着物を出されて、沢「何じやこれはひどい物を持って来たな、第一臭いじゃないか」三「御前外に仕方が無いから馬丁の着ておりましたのを脱がして持つてまいりました、お気味も悪うございましょうがこのくらいまで奮発して姿を変えなければなかなか今の危険を逃れる事は出来ません。どうぞ一時の苦しいのを厭わずにこれをお召し下さい」と云われて、御前は召しておつたる衣服を脱ぎ気味の悪そうな顔をしながら垢だらけの虱が二三疋居びきそうな見たばかりで身体がムズムズする着物を代りに着て、立派の若い者になつたと云いたいが何しろ今申した通りの着物であんまり古過ぎるゆえにとても威勢のいい若い者とは見

られない、実に何ともかとも云われないガリガリ亡者の碌でなしとより外に見えない。けれどもこれなれば安心じゃまずこの姿なれば人に知られる氣遣いないと、他人の汚れた着物を着て心持は悪いが大いに安心を覚え、これより足に底の厚い皮の、こわい見たばかりで豆が出来そうな靴を履き、頭にポッチの失なつた穴の明いてる屑屋に売つても一銭にはなるまい、焼芋の代にもちつと覚束ないと云うような帽子を冠り夕方になつてから密かに城の裏門から出ましたが、御前は今まで門より出る時には必らず馬車にお乗りあそばして多くの家来でも連れてお出でなすつたのが今晚はただ独り風呂敷包みを背負て手に一ツの杖を携さえ一人の供もなしに、これより山道になり人の目に触れてはならん、姿は換えてもちつとも人の目を避ける方が安心と夜通しせつせつと急ぎ足に歩行たが、夜が明けて空が少々明るくなると山に這入り一日草の中に隠れ日の暮るまで寝ており、日が暮てより再び出てまたその晩も夜の明けるまで道中いたし、明るくなればまた同じく草樹の蔭に隠れていてまた夜になると出る。実に佐竹の原へ出る夜鷹もよろしくという塩梅で、とうとう四晩道中いたしてその払曉になりまして海岸の処へ着きました。今昇つたばかりの日の出の明りで見れば海の向うの方に幽かに見えるのは英国の山、愛宕山辺りから上総房州の山を見る如くに見える仏国と英国の間の海、ホンの僅かと思えど船がなければ渡られん、此所まで首尾よく参つたがこれより如何に致したものと